メッセージアウトライン
サムエル記第一21:1～15

「主に身を避ける者の幸い」

[1]「ダビデはノブの祭司アヒメレクのところに来た。アヒメレクは震えながら、ダビデを迎えて言った。『なぜ、お一人で、だれもお供がいないのですか。』」
　王子ヨナタンとの涙の別れの後、ダビデはノブの祭司アヒメレクのところに行った。
「ノブ」はサウルの住むギブアからエルサレムへの途上にある。そこに主の宮があった。祭司アヒメレク(アヒヤ)は14:3節によればサムエルが小さい時に仕えた祭司エリのひ孫にあたる。彼は王の婿であり、千人隊長でもあるダビデが一人で来たのは何か緊急事態が起こったのかと恐れ、いぶかった。
[2]「ダビデは祭司アヒメレクに言った。『王は、あることを命じて、【お前を遣わし。おまえに命じたことについては、何も人に知らせてはならない】と私に言われました。若い者たちとは、しかじかの場所で落ち合うことにしています。』」
　ダビデは王の急な命令があったのだと言う。「若い者たち」と落ち合うとの説明についてはうそと考える者が多いが、マルコ2:25~26のイエスのことばなどから見ると、うそであるとは即断できない。
[3-4]「『今、お手もとに何かあったら、パン五つでも、ある物をください。』祭司はダビデに答えて言った。『手もとには、普通のパンはありません。ですが、もし若い者たちが女たちから身を遠ざけているなら、聖別されたパンはあります。』」
　ダビデは取るものも取りあえず、王の命令で急に出て来たので、食べるパンもない。それで祭司にパンを求める。「聖別されたパン」とは聖所に供えられるパンのことで、主の臨在を表し、安息日ごとに取り換えられる。アロンの子孫である祭司だけが食べることができた。→レビ24:5~9
　「若い者たちが女たちから身を遠ざけて…」とは儀式的に汚れがないことを意味する。アヒメレクはそのような条件を満たせば、聖別されたパンを提供できると言う。これはレビ24:9の教えに違反するようであるが、主なる神によって立てられた王の命令によって遣わされてきたダビデたちのいのちには代えられないとの判断であったかもしれない。
[5-6]「ダビデは祭司に答えて言った。『実際、私が以前戦いに出て行ったときと同じように、女たちは私たちから遠ざけられています。若い者たちのからだは聖別されています。普通の旅でもそうですから、まして今日、彼らのからだは聖別されています。』祭司は彼に、聖別されたパンを与えた。そこには、暖かいパンと置き換えるために、その日主の前から取り下げられた、臨在のパンしかなかったからである」

ダビデはアヒメレクの問いに答えて、若者たちのからだは聖別されていると言い、聖別されたパンをもらった。「臨在のパン」とは主なる神の臨在を示すパンと言う意味で、聖別されたパンと同義語。
[7]「――その日、そこにはサウルのしもべの一人が主の前に引き留められていた。その名はドエグと言い、エドム人で、サウルの牧者たちの長であった――」
「エドム人」…イスラエル人の先祖ヤコブの兄エサウの子孫。彼が聖所の中にいたということは、彼が主なる神を信じる改宗者であったことを示す。「主の前に引き留められていた」とは、いけにえ用の家畜の牧者として摂理的に主によって引き留められていたのだと思われる。彼はサウルの牧者たちの長であり、後に恐ろしい働きをする。
[8]「ダビデはアヒメレクに言った。『ここには、あなたの手もとに、槍か剣はありませんか。私は自分の剣も武器も持って来なかったのです。王の命令があまりに急だったので。』」
これの本当の理由は、町に戻って武器や食料を持ってくる時間もなく、サウルから逃れなければならなかったからである。
[9]「祭司は言った。『ご覧ください。あなたがエラの谷で討ち取ったペリシテ人ゴリヤテの剣が、エポデのうしろに布に包んであります。よろしければ、持って行ってください。ここには、それしかありませんから。』ダビデは言った。『それにまさるものはありません。私に下さい。』」
「ゴリヤテの剣」…戦勝の記念品として布に包んで保管してあったのであろう。このようにしてダビデはゴリヤテの剣を手に入れた。
ここで覚えておかなければならないことは、ダビデが祭司アヒメレクのもとに行ったのは、食料調達や武器調達が主な目的ではなく、主のみこころを伺うことがその目的であったことである。→22:10, 13, 15　妻ミカル、預言者サムエル、王子ヨナタンとダビデを助ける者がいた。しかし、彼らと別れてこの後、自分はどうするべきかとダビデは思い悩んだであろう。そして彼は自分を今まで守り導いてくださっている主なる神のみこころを知ろうと祭司アヒメレクのところに行ったのである。
[10]「ダビデはその日、ただちにサウルから逃れ、ガテの王アキシュのところに来た」
主のみこころがどのように示されたかは書かれていないが、彼がこの後、ただちにガテの王アキシュのところに行ったということは、サウルに仕えることから決定的に離れるということを意味するであろう。「ガテ」…ダビデが討ち取ったあの巨人ゴリヤテの出身地。地中海沿いのアシュドデから南東に約20キロメートル離れたペリシテ人の町。
[11-13]「アキシュの家来たちはアキシュに言った。『この人は、かの地の王ダビデではありませんか。皆が踊りながら、【サウルは千を討ち、ダビデは万を討った】と言

って歌っていたのは、この人のことではありませんか。』ダビデは、このことばを気にして、ガテの王アキシュを非常に恐れた。ダビデは彼らの前でおかしくなったかのようにふるまい、捕えられて気が変になったふりをした。彼は門の扉に傷をつけたり、ひげによだれを垂らしたりした」

「かの地の王ダビデ」…油注ぎを受けたイスラエルの王としてのダビデを認めていたのではなく、イスラエルの女たちの歓迎の歌からの推測によってであろう。→18:7 ダビデはアキシュのところに身を寄せようとしてガテに下ったのかもしれないが、自分が戦いで多くのペリシテ人を殺していたので、今度は自分が殺されるのではないかと非常に恐れた。 それで彼は捕らえられた時、狂人をよそおい、それらしいふるまいをしたのである。

ダビデは精神錯乱に陥った時のサウルを間近で見ていたので、狂人がどういう行動をするのかをよく知っていたのであろう。

[14-15]「アキシュは家来たちに言った。『おい、おまえたちも見ているように、この男は気がふれている。なぜ、私のところに連れて来たのか。私のところに気がふれた者が不足しているとでもいうのか。私の前で気がふれているのを見せるために、この男を連れて来るとは。この男を私の家に入れようとでもいうのか。』」

ユダヤ教の伝説ではアキシュの妻も精神に異常を来たしていたという。それで「私のところに気がふれた者が不足しているのか……この男を私の家に入れようとでも言うのか」とアキシュが言ったというのはうがった理解であるが、それが真実であったかかどうかはわからない。

わかるのは、この時、主なる神の守りが特別にダビデにあったということである。誰が自分たちの兵士を数えきれないほど殺した敵軍の将を生かしておくだろうか。普通ならば有無を言わさず、即刻殺してしまうであろう。ところが不思議なことにこの時、ダビデはアキシュのもとから追い出されてしまい、いのちが助かるのである。後にダビデはこの時のことを思い、詩篇34篇を作った。全編がそうであるが、特に6~8節をすべて主により頼む信仰者は自分のものとして味わうべきである。

「この苦しむ者が呼ぶと、主は聞かれ、すべての苦難から救ってくださった。
主の使いは、主を恐れる者の周りに陣を張り、彼らを助け出される。
味わい　見つめよ。
主がいつくしみ深い方であることを。
幸いなことよ　主に身を避ける人は」

ダビデは主なる神を信頼し、主のもとに身を避けた。そして確かに主はダビデを死の危険から救い出してくださった。同じ神を信じる私たち信仰者も、どんな時でもこのお方に信頼し、その約束により頼み、苦しみや困難を乗り越え、神に感謝と賛美を献げ、礼拝する者となっていくことが大切である。